



パリの春節

山中 由里子 (やまなか ゆりこ)

本館民族文化研究部

朝からパレードの練習

パリに短期滞在する際によく泊るマレ地区の小さなホテルがある。部屋は狭くてあちこちがたがきているし、予約の際の要領が悪いので、違う宿を開拓しようとも思う。でも、逆に、改装中のドアが廊下に立ってかけたままだったり、宿の女主人が客のいるのも構わず、自分の母親と大喧嘩をしているといった混沌とした雰囲気醸し出すパリの下町の魅力はさすがに。宿の「看板娘」は、器量は悪いが愛嬌のあるブルドッグのマドモワゼル・ルルである。ロビーの片隅に置かれた、結構豪華な小型の長いすで、くおー、くおーと、昼夜いびきをかいて寝ている。口の脇から舌がはみ出た寝顔がなんとも愛くるしい。

そんなルル嬢に惹かれて、結局またそこに泊ってしまった二月のある朝、窓の外でどんしゃらしゃらと賑やかな音がするの

で目が覚めた。何事かと思い窓をあけてみると、ピンクや黄色の鮮やかな衣装を着たアジア系の男女一行が、全長二〇メートルもない路地全体を陣取ってパレードの予行演習を始めていた。先頭のリーダーが振り回す旗には「法國華僑華人會」の漢字が見える。近くの広場に赤い提灯がかかっていたので、春節(旧正月)の行列の振り付けを練習しているのであろう。パリの中華街は左岸のイタリー広場周辺にあるが、右岸マレ地区の服飾関連の間屋街にも華僑が進出してきている。この辺でも春節の「巡遊」をするようだ。

植木鉢でひと悶着

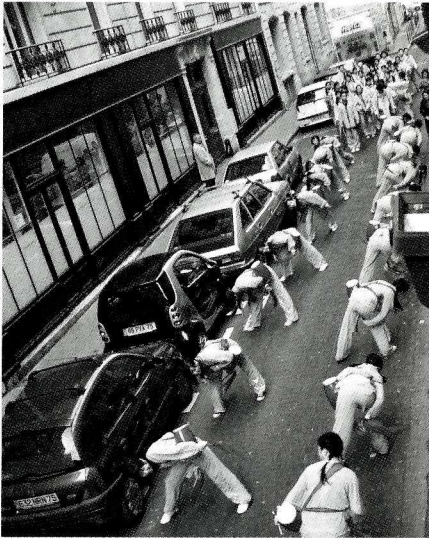
近所のカフェで朝食をとった後、宿に戻ってきくとロビーがえらく騒がしい。警官二人を取り囲んで、ホテルの女主人、その息子、そして女主人の母親である老マダムが早口のフランス語で何やらまくし立てている。ルル嬢はいつになく興奮していて、警官の足の周りをぶんぶん鼻をならしながら歩き回っている。

立てた客が上階から投げ降ろした植木鉢が、行列とはまったく関係のない通行人をあわや直撃しそうになり、その歩行者がホテルに怒鳴り込んだようだ。そして受付が混乱しているあいだに、くだんの客はさっさとずらかってしまい、息子が追いかけたが、近くのアパルトマンの家庭に消えてしまい見失った、ということだ。さらによく話を聞いてみると、投げたのは宿泊客本人ではなく、客とともに一夜を明かした人物のようだ。しかも宿泊客もその一夜の伴も男性のようだ。そういえば、この辺りにはホモセクシユアル向けの飲食店や本屋が多い。

植木鉢が投げられた部屋にまだいるはずの客を何故事情聴取をしないのか、そもそも連れ込みが許されるのか、と不可解に思いつつ傍観していると、「その人はぎつと、あのちつちやな中国人たちが嫌いなのだよ」と上品な白髪のマンがやんわりと言った一言がチクつと耳にささった。同じ東洋人のわたしとしては、目の前で「レ・プチ・シノワー(ちつちやな中国人たち)」と言われては、「マダム、それは人種差別的発言でございますわよ」と反論したくなるが、事はさらに收拾がつかなくなるので聞き流すことにした。

空港行きの送迎シャトルが来るまで、ロビーに座って彼らの陳情に聞き耳をたてた。どうもパレードの練習に腹を

そのうちミニバスが迎えに来てしまったので、どのみち收拾がつきそうにないこの「コメディ・フランセーズ」の一幕を後にしてホテルを去った。ルル嬢だけが申し訳なきさそうな目つきで見送ってくれた。



路地裏で「巡遊」の練習中